



今人千歌發句集

秋





今人千題發句集卷之三

梅室素心校正

むく英之部

睦白

のいさうらひのきあき睦白  
あきあき睦白  
睦白  
睦白  
睦白  
睦白

子母を捨てて  
睦白  
睦白



し  
蝶

物なきる人のお湯やし  
蝶

梧山  
子傳

まの夏之部

夏  
の秋

山里がさるも社もまは秋  
ひくはさるも初るも夏の秋  
産之地や白も中もまは秋  
夏秋ののちもまは秋  
白はうてまは秋

万傳  
由誓  
冬持  
九起  
金用

虫牛の序は相まは秋

雅夏

下

虫干

縁まぬて虫の虫干あう  
虫干や産ハ入白の虫まら  
まの干や結春の産まら  
虫干の産中を産や山の白  
虫干や産中ハまら

東水  
由誓  
古武の  
産中  
佳夕

まの秋之部

木槿

まの秋てまらまの秋  
まの秋てまらまの秋  
物とくまらまの秋  
赤はうて人のまら

兄引  
卓他  
守耕  
冬唯



崎崎ハミヨノ万のふしむもけ  
一甲作し本権居れハミヨノ

名店  
巻札

藤子

昔より知してまはるもくこく  
つる昔の家相くつろくもくこく  
昔よりいよは無くつろくもくこく

竹巻  
梅山  
巻古

一

よしつるハミヨノの巻や新の巻  
三の巻やまや物アミヨノ巻の巻  
自アハの巻は手捲りもくこくの巻  
崎さつろくもくこくは巻の巻毎ハ  
自我掲もくこく巻の巻は巻の巻

如柳  
巻古  
梅山  
自  
小瓶

送火

送し出や精向ふ巻のまめくし  
高きつて人の送火録の行巻

尺外  
巻古

送

雁ハ巻て外村の巻も送つろく  
巻一巻つ門を焼く出巻つろく  
松明の巻もつろく巻も送つ

巻古  
送古  
巻古

巻ノ巻ノ部

巻前

昔より巻くけて巻前山相く丸  
巻門を焼て巻前巻もつろく

東寺  
一巻



宝咲

宝咲や屏風の内の一りき  
宝咲や時よ遠くを流るる  
と枝もはらうと咲や宝のま

梅子  
景交  
崎花

一ノ喜と部

強初

灯よりて袴つけや強初  
ゆあしき大盆やうきいそめ  
信そめをさるき夢の奥ゆ

柏樹  
雲山  
不車

獨

きり層も獨活のそとぬ白い水

荀山

信

廻極千一匠のそと也芳獨信ハ

高丸

号や晴のな怪形もあき白お  
程方のうきいそや信は作うき  
うきいそや晴てさるもをいそき  
号や下巻を出て晴長ふ  
号やい良とさるまじりか  
うきいそや長言て初結のそ  
号のそのおよ編足う一飛  
号茶提てうきいそをうき  
うきいそや一甲の初て二五門  
晴のうきいそ近き山路うき

風山  
一月  
風船  
梅子  
穴外  
一旭  
柳壺  
銀信  
秋富  
小山

号



うらゝいそやきうう晴ふぬる雨  
 号や 年以旭はきく 向い  
 昔のちよき号一枝のありう  
 昔るや 向のちよき号 晴り  
 号や 晴りそきあうて 枝うつ  
 昔るり相ねる 漏垂ぬる丸  
 昔るや 晴りそき程つる 号の枝  
 うらゝいそやきく 向のちよき 益  
 号や 不きる 人のあうらなき  
 号のちよきや 向のちよき 益  
 うらゝいそやきく 向のちよき 益  
 向やうくや 初号よき 益の障

田 扁  
 古 儼  
 丁 初  
 梅 之  
 号 笑  
 布 伯  
 卓 他  
 糸 苜  
 号 色  
 梅 通  
 而 先

号

号や 毎のちよきを結る

谷の中や 号 角初丁号の号  
 うらゝいそやきく 向のちよき 益

号 智

号のちよき 向のちよき 益  
 号のちよき 向のちよき 益

号

号のちよき 向のちよき 益  
 号のちよき 向のちよき 益

五か木

号のちよき 向のちよき 益  
 号のちよき 向のちよき 益

南 山











うゝまゝに神

卯月

帆柱のひらけぬるお月小  
先くも橋多徳らるお月小  
中水の音も移よきおつき小  
おつきもさるやお月の橋重柱

舟形  
橋重  
蒼丸  
清水

茶扇

人けりて茶扇の屋中へ  
候へり出てあるわらわら  
靴きれて為掃手ふる茶扇小  
根先くもくも出るうまろ丸  
さうらき茶扇をいぢ書の内

一  
卓他  
直丸  
治  
相高

下

おむ

時替もあそねおのむき  
浴衣のおのむき

唐氏  
克亨

卯の花

おのむやわらわら向いて咲き  
うはそや桐もそらる蒼の火  
おのむやわらわらハ折か  
おのむやわらわら流るる丸  
おのむやわらわら丸

水作  
卓他  
蒼丸  
一丸  
所路

ぬも物のあきらみ  
海やのて移をきよき

信年  
良捕



栲

伊先を栲が栲匠のやまらま  
上子作し罷さるるこむ栲灘は  
先より栲匠の管のやまら  
りまらぬ栲舟もなまにわの門  
門ありよりるいふねの角に  
栲のちまを居る相善や森の中  
一雅  
井丈  
精器  
一佳  
如柳  
去風

存

存をありあやむのうら  
うさささだ存の通て向うる  
知風

考  
考り

考を入て考は流し餅のうら  
考を入てうらういふ何の氣を  
秋彦

下

入

考を入て考の身のあきま  
考外

打水

打水をやめて高りり  
うら水のうらま合やあ隣  
打水のうらま合やあ隣  
流をうらま合やあ隣  
中をうらま合やあ隣  
千代

広

広をうらま合やあ隣  
広の中をうらま合やあ隣  
葉やあてあつる広のうら  
西了  
松溝  
壽之  
兄外



咲くれば葉もくらくらぬ  
村の君をさして送るぬ  
周林  
有松

羅 落葉月影を照らす  
夕陽の影を照らす  
ト字  
生香  
秋香

為相打 之秋きて後を  
白の白打 一りきける  
傳香  
精止  
松丈

秋と部

鶉 一若きし 今も  
二若きし 今も  
三若きし 今も  
可合

未枯 未枯や 秋の  
未枯や 秋の  
大木  
有松

縹葉 縹葉は 秋の  
縹葉は 秋の  
精止  
有松



うき

うきをばのしをし煙の煙一飛  
うきをばあめりのしをし煙の煙

桐 山

梅

うきをばのしをし梅の梅  
うきをばあめりのしをし梅の梅

松 梅

梅  
うき

下をうらうら梅の梅  
うきをばあめりのしをし梅の梅  
うきをばあめりのしをし梅の梅

可 梅  
梅 文

うきをばあめりのしをし梅の梅

下

梅  
うき

うきをばあめりのしをし梅の梅  
うきをばあめりのしをし梅の梅  
うきをばあめりのしをし梅の梅

一 梅  
梅 文

梅  
うき

うきをばあめりのしをし梅の梅  
うきをばあめりのしをし梅の梅  
うきをばあめりのしをし梅の梅

梅 文

うき

うきをばあめりのしをし梅の梅  
うきをばあめりのしをし梅の梅  
うきをばあめりのしをし梅の梅

尾 山  
山 文



為水

立てり水の始り為水  
船一の傍てあるまゝ水  
舟側ハミを看詰り為水

乃々部 いへん

の、集々部

海  
雲

山甲や木の葉まゝに結る雲  
清のくる雲や 西日の影長き  
吐月

糸初

糸初や 夕日よあけよ 糸の重  
吐月

長深

の、初や 遠くよ見ると 糸の

長深は 生るるのるわく  
糸初にて出まは風やうら  
長深まの初まはまうぬ 糸の重  
糸のしるまゝの糸も 長深なり  
青はよま 長深まや 山のうね  
糸のうらの初まはまゝ 長深ハ  
の、うさや 糸の甲 糸の糸車  
五耕

野蒜

一とまの 糸の 糸の 糸の 糸の  
為水 一とまの 糸の 糸の 糸の  
秋 糸



清言

新金や 知は清言の拾し物 子山  
 其生地は信はるか昔は清言の味 ひと女  
 そのの戸やその家の名のみよつく 菅花  
 其清言や 夕の光ぬまよき風 一佳  
 生のりの香の籠りよるも 柳花  
 清言の香や 清言の籠る信ふ人 梅香  
 言はるるも 清言の香の深まらる 崎花

の、身、心、部

飛 雲のるる、しきぬが 身、心、部 風、雨

琴

あつたよ 琴の幽しや 流りゆく 梅香  
 琴よ 籠のよよつとて 籠るる 梅香  
 清言の籠りゆくを 清言の籠 冬香  
 雲の向はるる、しきぬが 琴の籠るる 冬香

清言

清言よ 素の内留ちるる 其の後 大鵬  
 清言や 水なき川を 清言のよ 冬香  
 清言や 其のぬれよ 其の上 大梅  
 其よ 立て居るはれよ 其の 風、雨  
 其よ 立て居るはれよ 其の 風、雨  
 大名の 唐百居るはれ 其の 見、和、雅



幟

のりもろくしきもろく使われ  
子孫者の市子中きまのりもろく  
のりもろくしきもろく使われ  
我家よ臨ぬのりもろく  
作らりし造りし極屋の幟もろく  
おしきりて家柄もろくのりもろく

良補  
甲斐  
卓他  
百壽  
能壽  
祖友

のりもろくしきもろく

よくしきもろくしきもろく  
標もろくしきもろくしきもろく  
そりもろくしきもろくしきもろく

石作  
学舎  
下

后の月

表出ハハふりもろくしきもろく  
板橋ハハふりもろくしきもろく  
いし板橋ハハふりもろくしきもろく  
おしきりて家柄もろくのりもろく  
おしきりて家柄もろくのりもろく

一柳  
忠行  
能古  
能古  
素風

野分

孝鳥左方くりもろくしきもろく  
川水の危きもろくしきもろく  
おしきりて家柄もろくのりもろく  
おしきりて家柄もろくのりもろく  
水もろくしきもろくしきもろく

冬義  
能古  
一雅  
能古  
能古



鳥の雛

くまのよはつあきやちの雛  
路入の雛の好まやのちの雛

芭九  
斜白

の、冬、部、冬、影

た、部、を、入、ル

ノ、ハ、ノ、喜、ミ、部

元日  
元日  
元日  
元日  
元日  
元日  
元日  
元日  
元日  
元日

疾、甲  
万、像  
棋、石

草花

元日  
元日  
元日  
元日  
元日  
元日  
元日  
元日  
元日  
元日

一、帆  
小、観  
元、外  
一、高  
柳、産  
一、夕

鬼  
師

鬼  
師  
鬼  
師  
鬼  
師  
鬼  
師  
鬼  
師  
鬼  
師

素、屋  
厚、竹  
儀、物



吟積

吟積も嵐のりけくある白萩  
くわつゝ八雲よりけりあうりう  
吟つゝや積もささぬ備や  
吟つゝや積もささぬ備や天  
くわ積も子の敵をさす親子外

大橋  
青嶺  
梅意  
竹砂  
一尺

蒸姑

泥のまてこそおぬえうり蒸姑初  
海しう。家おしつ回のくまは極

一儂  
成女

蒸井

蒸井もささぬ備のさうりうき  
こころな帳もささぬ備のさうりうき

一儂  
蒸古

草餅

くま草餅も 雲のけの遠きなり  
白遠き極のわくわくささぬ備  
蒸上るや積もささぬ備のさうりう

真雅  
句兮  
五光

草餅

生あふも積のさうりうの極  
積もささぬ備のさうりうの極  
雲のけの遠きなり  
水合しきささぬ備のさうりうの極  
蒸上るや積もささぬ備のさうりう  
白遠き極のわくわくささぬ備  
蒸上るや積もささぬ備のさうりう

一儂  
蒸古  
句兮  
五光



くノ夏之節

競

くろくぬき 了るくろくぬき 了るくろくぬき  
ゆくわくま 報に事しハ競了  
何れにゆくまも寺にや競了

一 大 下  
一 大 下

灌佛

灌佛にやと倉斗いと一  
法にやと灌佛の講ハの法  
灌佛にや寺にやと灌佛  
灌佛の灌佛にやと灌佛

一 桶 一 桶  
一 桶 一 桶

茶ノ

茶ノ茶ノ茶ノ茶ノ茶ノ

一 瓶 一 瓶

下

日

花の

花の花の花の花の  
花の花の花の花の  
花の花の花の花の

一 瓶 一 瓶

栗の

栗の栗の栗の栗の  
栗の栗の栗の栗の  
栗の栗の栗の栗の

一 瓶 一 瓶



おしるるむまきまやうのち

紐々

櫛の子

櫛の子や櫛除の偏一多所  
櫛の子やてまけしあお相也

ト子  
千代

水勢

年とるお午の網や水勢  
水勢はてはる近く水勢は  
水勢はてはる近く水勢は  
水勢はてはる近く水勢は  
水勢はてはる近く水勢は  
水勢はてはる近く水勢は  
水勢はてはる近く水勢は  
水勢はてはる近く水勢は

共備  
乃乃  
梅家  
一友  
一雅  
一多  
卓他

茶玉

茶玉の物よさくぬ白い丸  
茶玉やらうつ字よ書のりき  
水勢はてはる近く水勢は  
水勢はてはる近く水勢は  
水勢はてはる近く水勢は  
水勢はてはる近く水勢は  
水勢はてはる近く水勢は  
水勢はてはる近く水勢は

耕田  
素風  
桂林  
舟外  
悠哉  
孝南  
龜遊

海月

海月の物よさくぬ白い丸

信音



うらり 碓の刺て味よき海月ト

末山

海月の能く白しや雪の峰

梅松女

了の背よ砂の接しや雪のね

梅雪

磯りけく白ふ市場や雪の峰

松崎

海士もまた叫ぶるは雪の峰

ト子

牛曳のつゞく山路や雪の峰

秋富

京介の一篇はや雪のね

標雪

板下りの生のつゞくや雪の峰

春來

帆よ〜〜ぬ風のま〜いお雪の峰

桂志女

舟場まで石置るまや雪のね

高山

山、水のうら〜〜るや雪の峰

惟懺

雲の峰

海中央や多よりの山も雪の峰  
夕〜〜よ遠近りけく雪のね  
接舟よ向のま〜い雪の峰

梅雪女  
卓他  
塞了

雪ま〜くや雪〜〜る雪のね  
雪ま〜くや雪よ〜〜る雪の音

雪音  
松白

雪菜

雪水や赤〜〜のま〜い女貞木  
松風よ〜〜く雪水の峰よ〜〜る  
雪水よ雪木の戦き石つけり  
雪の水や〜〜る雪の音

大鵬  
逢流  
縁賀  
崎島

雪水



くノ秋之部

草の花

楽古

白如石より織山や字の  
重きれのろるゝもや字の  
白よ伏きりささるゝ字の  
重きる地の羅活や字の  
白能くろの重しや字の  
門ありて國多さるゝ字の

其意  
虚意  
古手  
古補  
士明  
梅室

あろ金やあろもくも楽古  
くろもくも楽古

一  
祖  
白

下

九月

暮秋

尚葉

菜垣

あろ金やあろもくも楽古  
くろもくも楽古

龜  
悠

船のこももくも楽古  
あてこももくも楽古

梅  
外

川筋や白あもくも楽古  
あろもくも水あもくも楽古  
あろもくも水あもくも楽古

魚  
素  
梅  
石

あろもくも水あもくも楽古  
あろもくも水あもくも楽古

藤  
古  
梅  
山



あかりのあかりきくいと答へたり  
秋景

つる市のあかりはさきさき  
後物

つる市やふれぬよきとせし  
一色

つる市やふれぬよきとせし  
一色

つる市のあかりはさきさき  
一色

あかりのあかりはさきさき  
と都

あかりのあかりはさきさき  
と都

あかりのあかりはさきさき  
と都

あかりのあかりはさきさき  
と都

あかりのあかりはさきさき  
と都

草市

九

月

三

七

栗

あかりのあかりはさきさき  
木山  
後物  
世岐  
栗古

栗

あかりのあかりはさきさき  
木山  
後物  
世岐  
栗古

三



くろくろく

口切

口切や一申すきくは依の者  
口きくやさしてありて居る  
口きくや持たるるもさの先

考学  
希伯

学枯

学枯や依株よ呼りきりく  
くろくろくろくろく  
学枯やさるるらりきさの足

信者  
舟屋  
枯山

くろくろく

くろくろくやさるるらりきさの足  
くろくろくろくろく  
くろくろくろくろく

一  
梅系  
船

福

くろくろくや何を同命よ呼り鳥  
くろくろくくろくくろくくろくくろく  
物めくろくくろくくろくくろく

柴人  
大  
小

せう

せうくろくくろくくろくくろくくろく  
せうくろくくろくくろくくろくくろく  
せうくろくくろくくろくくろくくろく  
せうくろくくろくくろくくろくくろく  
せうくろくくろくくろくくろくくろく  
せうくろくくろくくろくくろくくろく  
せうくろくくろくくろくくろくくろく  
せうくろくくろくくろくくろくくろく

小  
大  
小  
大  
小  
大  
小  
大



おの喜ぶ部

老  
相子

つく相子よふれて又飛雀くぬ  
やの相子や天井空き後屋敷  
子あふく相子きくしうの先  
なるなる奥のやまや相子の音  
あつ相子よふて遊ゆし男く  
やの相子や風のりやうてまよふき  
あつ相子やまらむさうらむさうら

文様  
揺年  
素柳  
柳渡  
尾山女  
草笠  
露古

義入

義入やおぬれはよ人く  
牛の背よのまてまらや義入の

小亭  
初喜

山笑

やぬ人の一の地まや  
義入やまらむさうら

立巻  
草池

我名のまらふくぬ山笑  
山笑よまらむさうら  
化粧くまらむさうら

丁初  
松古  
東橋

まらむさうら  
子まらむさうら  
白の上やまらむさうら  
降まらむさうら  
風まらむさうら

厚柳  
素葉  
一  
柳  
出年



柳

帆の尻で静くささる柳  
カハ入るくねは八尋の河に遠柳  
新船や柳も吹ぬ岸の河に  
船は静くささるてはく柳  
晴くささる年の古き柳  
多れ驚く出てささる柳  
末端の素肌ささる柳  
まき柳や布撰ふらうる扇店  
柳まて夕のまてははる舟  
浩まてはささるささる柳  
柳のささるささるささる柳  
柳の柳 我物ささるささる

續作  
尻外  
甘鼻  
文賀  
佳風  
花僕  
相島  
卓他  
一益  
一毒  
ささる女  
柳景  
下

山焼

蒲生

田原もいしね土の柳  
橋よのりかきや柳よささる  
陰年の動けんささるやささる  
徳の徳柳よりささるはささる  
其居や柳よりはささる  
は時よさつてささるや山焼火  
山焼や一本橋ささるはささる  
赤よ入や山焼ささる山焼

みきや  
菜よや菜の菜  
柳  
生  
相  
小  
帆

文友  
要五  
不及  
甘流  
以禮  
喜宝  
一旭  
香店  
一帆  
小帆



柳のふき色や 浮生の麦も舟  
人々のをりや 浮生山  
素交 似松

山吹

水とておく山吹のやを止ま  
山吹や 舟を元おくる舟  
素交 山吹もや 柳の水  
山吹や 舟もよむ水ハ津裏  
素交 山吹 舟

や 舟もよむ

萩梅

大寺のこのへ地房 萩梅  
萩梅や 萩梅もいしや  
素交 山梅

町中よまゝ山寺や 萩梅 百杯

や 萩梅

柳教

雪降のいろもよまゝ 柳  
洪水の流しや 柳  
のきり 柳もよむ 柳  
素交 柳

葉若類

浮舟の白よ 舟もよむ 山  
流舟の流もよむ 舟もよむ  
舟もよむ 舟もよむ 舟もよむ  
後松



やま

街々の轆子つゞく  
やまをきき生かす物や赤の程

尺外  
素交

山粧

先づけよ山粧よや木舌の尖  
裏表をよよふ山の粧い  
白の上よきむやまや山のけり

秋  
字  
百  
杯

おのまきと都

山成

さハま丸里くまふまう成の山  
山成のやまをよよふ山のけり  
けり水よううーと山成のけり

向  
祖  
梧  
山

ハ目  
綴

冥川のやハ目うまきし居さ  
くろらぬやハ目綴の綴まきみ

和柳  
菅  
尾

尾拂

清うき物の跡をー尾拂  
先あよよのこまきれぬ尾拂  
二人あて呼ましうやうね  
已う身を何よほめて尾まき  
夕暮やまきうまき尾拂

西  
一  
小  
龜  
尾  
子

おのまきと都



松の内

人の身て赤も 赤もさぬや松の内  
若くもさくもさくもさくもさくも  
赤もさくもさくもさくもさくも  
赤もさくもさくもさくもさくも  
赤もさくもさくもさくもさくも

仁里 卓他 欽哉 水産 津産 梅山

萬葉

赤もさくもさくもさくもさくも  
赤もさくもさくもさくもさくも  
赤もさくもさくもさくもさくも  
赤もさくもさくもさくもさくも  
赤もさくもさくもさくもさくも

系魚 牛契 玉蓮 桂歌 宿居

松の花

万葉や 何れも松のさくもさくも  
万葉や 何れも松のさくもさくも  
万葉や 何れも松のさくもさくも  
万葉や 何れも松のさくもさくも  
万葉や 何れも松のさくもさくも

山鳩 丁お 葵丸 季田

松の引

人のもも 松のさくもさくも  
松のさくもさくもさくもさくも  
松のさくもさくもさくもさくも  
松のさくもさくもさくもさくも  
松のさくもさくもさくもさくも

柳子 藤古 浦氏

松の引 何れも松のさくもさくも  
松の引 何れも松のさくもさくも  
松の引 何れも松のさくもさくも  
松の引 何れも松のさくもさくも  
松の引 何れも松のさくもさくも

紫倉 得基



馬刀

馬刀のくさくさ刀よるのきけ句歌  
馬刀のくさくさ刀よるのきけ句歌  
馬刀のくさくさ刀よるのきけ句歌

馬刀  
山  
以  
子

まう 春之部

松

松のくさくさ松よるのきけ句歌  
松のくさくさ松よるのきけ句歌  
松のくさくさ松よるのきけ句歌

尺山  
子

豆の

豆のくさくさ豆よるのきけ句歌  
豆のくさくさ豆よるのきけ句歌  
豆のくさくさ豆よるのきけ句歌

豆  
素交

生菓  
瓜

生菓のくさくさ生菓よるのきけ句歌  
生菓のくさくさ生菓よるのきけ句歌  
生菓のくさくさ生菓よるのきけ句歌

由  
誓

まう

まうのくさくさまうよるのきけ句歌  
まうのくさくさまうよるのきけ句歌  
まうのくさくさまうよるのきけ句歌

一  
柳  
大  
外  
枝

まう 秋之部



相出

相古や 寺乃と 墓の 笑何

大精 菜古 云光

曼珠 何花

乞食の子も 盲者も 曼珠何花 井戸の村よ

得甚 高丸

待膏

待膏や 月も 遠見下まの こと ありよ ね 山屋も つき 八重も ありき 待膏おし 土水の 跡を 見て くるる 白の いろも ね 待膏の 光り 八 かつ 膏や 聖も あり 一 叔を 文に

五山 飛一 女 宿 曼 一 具

洞 菜

洞川 菜や 薄 ありき 富 竹ん 万しき 菜や 秋も とき 木の ね

雄 菜 山 燈

相茸

まつ ことし あり 相茸や 堀の 外 相茸や 秋も とき 木の ね

大 梅 万 像

一豆亭

豆亭 豆亭や 様の本 亭も あり 水 跡

権 物 高 丸

舞市

舞市 舞市 舞市 舞市 舞市 舞市 舞市 舞市 舞市 舞市

多 代 女 梅 鳥



まのまゝ

豆舟

若くはくわくわくしてあつて豆の豆  
豆舟の初子しきりハ極多舟  
舟はまゝまゝしきりハ極多舟  
舟の初子しきりハ極多舟

けのまゝ

舟

舟くわくわくしてあつて舟の舟  
舟の初子しきりハ極多舟  
舟はまゝまゝしきりハ極多舟  
舟の初子しきりハ極多舟

の

舟くわくわくしてあつて舟の舟  
舟の初子しきりハ極多舟  
舟はまゝまゝしきりハ極多舟  
舟の初子しきりハ極多舟

文

舟くわくわくしてあつて舟の舟  
舟の初子しきりハ極多舟  
舟はまゝまゝしきりハ極多舟  
舟の初子しきりハ極多舟

舟

舟くわくわくしてあつて舟の舟  
舟の初子しきりハ極多舟  
舟はまゝまゝしきりハ極多舟  
舟の初子しきりハ極多舟

舟くわくわくしてあつて舟の舟  
舟の初子しきりハ極多舟  
舟はまゝまゝしきりハ極多舟  
舟の初子しきりハ極多舟



五下

ふりてふふふふふふふふふふ  
ふふふふふふふふふふふふふふ  
ふふふふふふふふふふふふふふ  
ふふふふふふふふふふふふふふ

成り女  
古鏡  
尺雅

けの夏三郎

芥子

ふれらぬやふふふふふふふふ  
ふふふふふふふふふふふふふふ  
ふふふふふふふふふふふふふふ  
ふふふふふふふふふふふふふふ  
ふふふふふふふふふふふふふふ  
ふふふふふふふふふふふふふふ  
ふふふふふふふふふふふふふふ  
ふふふふふふふふふふふふふふ

梅室  
卓池  
以鏡  
青雅  
厚那  
尺岳

夏花

夏花

ふふふふふふふふふふふふふふ  
ふふふふふふふふふふふふふふ  
ふふふふふふふふふふふふふふ  
ふふふふふふふふふふふふふふ  
ふふふふふふふふふふふふふふ  
ふふふふふふふふふふふふふふ  
ふふふふふふふふふふふふふふ  
ふふふふふふふふふふふふふふ

藤山  
みみ  
龜来  
陸雅  
卓池  
御堂  
物之  
南枝  
尺岳







鶴阪

鶴阪中 伸もあしぬくられ  
あめものも赤きかきく鶴阪む  
鶴阪中 戸櫃の中もこわき  
鶴阪中 くれもあめのもは

向き帆  
赤側  
杜崎  
木

け  
前

けー前中 風をひいてか  
うまうや 通貫の島境

橋山  
寛甲

けん  
前

けん前 甘みつてあ  
かきくもあハ何とけん  
ぬきぬくは鶴のあきく

山雄  
青雅  
景交

け  
ノ  
冬  
之  
部

玄  
猪

玄猪 古風のある玄猪  
火を焚く人をもる玄猪  
解法の新創もつぬ玄猪

雨守  
尺山  
護物

ふ  
ノ  
冬  
之  
部

福  
菜

福の菜 足年のもある一種  
ゆき菜や書ての菜もあ

松竹  
ゆき

子のあきくもあるのちう

絨卸







福

蕨の墓

たて並てさうよきや蕨の墓  
手よのせてほりほそくや蕨の墓  
恒通ふ馳けろきや蕨の墓  
さむむよありて香のあり蕨の墓  
地蔵のつりと島や さきのつり  
子依木の蕨と山あり蕨の墓  
町よりしてさうよきや蕨の墓  
手揃て休む目先や蕨の墓  
物縁と鹿も世もや福の墓  
ねよさふ蕨の墓めや福の墓

梅室  
木蓮  
瑞他  
東園  
素山  
徳心  
布國  
峰風  
蕨物  
卓丈

蕨

福

過さるるあけてあさや福の墓  
柴垣をつかさもきほ蕨の墓  
結わゆるきてゆきほや蕨の墓  
墓あり西のさきやあまの墓  
風はうて手の届ぬや蕨の墓  
能うゆる蕨の墓あまの墓  
水底をえさて蕨の墓よきハ  
あさや一人よいさついであさ  
蕨軒の併るさつあや蕨の墓  
あさや兄の隣あさや

梅山  
秋高  
水亭  
可正  
一雅  
字池  
杖懸  
尺山  
飯袋  
松葉



ふノ夏之部

婦の干

婦の干中。小きき伏屋木  
ましく記よ遠山尾るやあり干

飯 透 伝

舟遊

まゝ舟若と人も交るや舟遊い  
嬉しき山々舟出きて船はし  
舟遊い。うまうま。匠若も交りし

尺 機 好  
百 山 山 好  
乐 山 山 好

佛生

善きよ。いん。の。い。ぬ。い。ぬ。  
人も。う。生。れ。と。時。ハ。い。け。い。ハ。

一 雅  
青 雅

下

有

何とハ。あ。こ。え。め。く。き。善。留。丸  
い。い。い。い。あ。ま。き。世。の。答。意。也。何。生。有

龍 寺  
奈 他

柄

井戸端の。い。い。を。や。柄。の。飛  
柄。飛。や。ま。う。る。所。の。物。一。つ。の。

山 鳥 籠  
山 海

富士信

何ろ。う。う。重。い。の。あ。る。お。ふ。二。信  
よ。一。物。の。信。者。い。う。富士。信  
二。親。を。持。こ。う。ま。あ。り。し。一。信  
ま。ま。や。結。ゆ。ま。う。る。ふ。二。信  
若。等。子。村。名。あ。り。て。富士。信

甲 妻  
雨 号  
南 々  
空 外



招舞水

山くくは招舞水を汲せり  
咽あめはくすまい水石のりて板  
を区や招舞水のきく湯

一信子  
信子  
子信

ふノ秋も新

文月

文月や味まのくくる京の水  
文月や舞くくくまの松の意  
くく月や招舞秋のきく緑の先  
生丸のくくく出まきり子の産  
給朱のくくく出まきり河の新く丸

梅室  
漢富  
宗二  
栗人  
龜朝

舞

蘭

舞舞を花の咲舞やまりて  
あく舞まきり舞の舞  
水くくく舞の舞  
何くくくよれぬ白くく舞  
あくくくく舞の舞  
あくくくく舞の舞

六丘  
甫山  
文信  
信物  
百壽  
何曉

芙蓉

舞舞一舞舞  
舞舞の舞舞  
尾舞の舞舞  
田舞の舞舞

信く  
年他  
青雅  
信物

世

世



ふ、冬と和

冬  
の  
目

後所の見うらや  
梅をまきる嵐の音や冬の日  
風上乃命大まきりて冬の日  
信よけの松まきりて冬の日

梅山  
冬地  
穴外  
鳥雅

冬  
の  
日

冬めりのてうらや  
うらやの松ぬく糸や冬まき  
冬めりのうらやの土飛う丸  
一後しおきしてうらや冬めり

冬居  
小観  
茶山  
梅景

下

冬  
牡丹

名やま咲きうらや  
船卵まきうらや牡丹

及守  
牡丹

冬  
の  
山

人甲まきうらや  
冬めりの松まきうらや  
冬めりの松まきうらや  
冬めりの松まきうらや  
冬めりの松まきうらや  
冬めりの松まきうらや

秋富  
穴外  
宮舟  
一南  
素交  
梅景

とらうらやまきうらや

一旭



古鷹

時を初るつる毎の昔や冬本立  
風名の古より何と春布冬本立

身他  
時友

柴漬

櫻子まてあさあまあさうり冬籠  
夏鳥の産を待つうり冬籠  
子料理の袖味味白布冬籠  
まてあさあまあさうり冬籠

可火  
焼水  
舟外  
生陸

柴漬

柴漬や一俵より少くとも白和  
柴漬や一俵より少くとも白和

生鼻  
道流

古鷹

古鷹の古鷹は飾り古鷹のみ

可厚

下

報

古鷹の古鷹は飾り古鷹のみ

宜船

報付や一俵より少くとも白和  
報付や一俵より少くとも白和  
自是より遊りぬるや一俵より  
きつたは報付や一俵より  
未生して報付や一俵より

宜共  
燕他  
青雅  
一陸  
京魚

蒲葦

了士の名にたて度はせん  
柴糶もももねん人の老る  
報付もももねん人の老る  
くく表もももねん人の老る

大梅  
重居  
五藤  
一雅



川若きし〜名ふゆらん、梅居

冬  
の  
雨

竹の老く梅のさるや冬の雨  
今年も雨のつらや冬の雨  
山のなきるあうや冬の雨  
多代女

冬  
の  
風

ふり向て雪吹かりては土橋は  
風はしてききかへるうきう丸  
光輝をくきとらうり、雪吹か  
りしき子結をのりる吹雪入  
り船のようつらまをうき吹か  
冬流  
一雅  
晴月  
松竹  
風如

下

冬  
の  
風

逗留の冬風名吹を好まうり  
少く吹やれ以てききまきしり  
素柳

冬  
の  
梅

素白の雨〜し〜冬をきりき  
一掃を大るよ冬の梅くぬ  
燈籠子灯もなきはや冬梅  
下りきうとほて居たはや冬梅  
顔のなききやきやう〜ゆ梅  
新  
看松  
冬窓  
石居  
酔由

冬  
の  
梅

うらうらむき〜屋の雪や冬の梅  
人きりの〜と〜梅うらゆのそく  
白毎年ハ出ぬ〜表や冬のそく  
後物  
一旭  
冬女



冬枯

冬枯や 新雪よ 多る 巻交  
冬枯の 音や しの 枯梅  
冬枯や つる 金の 先よ 吹り 捲  
冬枯や 鶴よ 鳴き けしき 雪の 垣  
冬枯や 鶴よ 鳴き けしき 雪の 垣

この巻の部

小山

飯糰も 抱折 為さう 小山 白  
明りけり 萩の にきり や 小山 白  
はるる 子 菖蒲 了り 萩の 小山 白  
意 風

下

冬

萩を ころめて けしき 雪の 垣  
萩の けしき 雪の 垣  
萩の けしき 雪の 垣

東風

東風の 勢 抱ひ けしき 雪の 垣  
東風の 勢 抱ひ けしき 雪の 垣  
東風の 勢 抱ひ けしき 雪の 垣

飛 けしき 雪の 垣



小松

行と路おしりまらる小松うめ  
松よついで側のお松しりまらる  
東とまよいお松のみわいら  
系物や 行と小松のてりまらる  
司まらるのしりてりまらる小松  
空まらる小松はねつり小松は  
君まらる小松はねつり小松は  
らまらる小松はねつり小松は

一松  
一松  
一松  
一松  
一松  
一松  
一松  
一松  
一松  
一松

小の芽

夕風の止てめらる小の芽は  
ついでにわらわらる小の芽は  
時どてにわらわらる小の芽は  
こたてにわらわらる小の芽は  
小の芽はわらわらる小の芽は

小の芽  
小の芽  
小の芽  
小の芽  
小の芽  
小の芽  
小の芽  
小の芽  
小の芽  
小の芽

約考

約考や片側折て一も  
約考や片側折て一も  
約考や片側折て一も  
約考や片側折て一も  
約考や片側折て一も

約考  
約考  
約考  
約考  
約考  
約考  
約考  
約考  
約考  
約考



紅梅

紅梅や梅除くもきききき  
紅梅や梅除くもきききき

重朝 伯遠 兄外

辛夷

一房鼻のきききききき  
一房鼻のきききききき

政二 一重 子傳

一こりききき部

梅の流きききききき  
梅の流きききききき

鳥谷 巨山

木下園

梅の流きききききき  
梅の流きききききき

梅意 新

更衣

更衣の流きききききき  
更衣の流きききききき

麻吟 侯亭 兄外 周郎 大郎 梅意

ねくねくきききききき

百年



苔の花

洗末を拵一簍や〜の石  
 名ふらん水の傍う〜の石  
 ねまふり外は春なり〜の石  
 岩をうつしのまふや苔の花  
 つらゆる水の傍うや〜の石  
 苔の心もと拵て〜の石  
 枯つてもその根の根や〜の石  
 踏也〜の石  
 温泉あり〜の石  
 春〜の石  
 雲〜の石

備外  
 徳定  
 愛家  
 ト早  
 三女  
 冬  
 月  
 宗古  
 卓也  
 砂月  
 龍雲

今年

今年  
 自れも〜  
 一本ハ〜  
 新ね〜

官補  
 茶雷  
 ト早  
 甲斐

この秋之部

禪

禪  
 卑下り〜  
 枯や〜  
 新拵〜

流雲  
 梅雲  
 芭丸  
 清音



今昔

店先や家の窓をくまなく  
老いたる縁さくまなく

五子  
山外

約

燈を絶えたる生け花  
土をこぼし、地をのりや約の香  
約中や梅は固まらぬとて

西了  
白波  
交水

こゝろをこゝろ

小  
六  
月

物像も鬼もあつた小六  
おのるがゆき中も小六  
親ふしておまのまじり小六

周那  
白三  
社水

下

小春

燈のりのあつた小春  
新のうらあつた小春  
あつた小春  
推の木の葉のあつた小春  
推柴をさよほつた小春  
燈をこぼし鳥のあつた小春  
燈をこぼしあつた小春  
梅のあつた小春

庵  
楮  
蒼  
龜  
探  
香  
有  
伴  
閑

答  
後

何れも後答や梅の上  
文てあつた答や梅の上

生  
廣  
吉  
後



霜あらしやうては人きえ積ハ暮らう

秋暮

風

あらしやうては人きえ積ハ暮らう  
風の暮らうては人きえ積ハ暮らう  
鳥やうては人きえ積ハ暮らう  
鳥  
止めらうては人きえ積ハ暮らう  
力  
あらしやうては人きえ積ハ暮らう  
あらしやうては人きえ積ハ暮らう  
あらしやうては人きえ積ハ暮らう  
あらしやうては人きえ積ハ暮らう  
あらしやうては人きえ積ハ暮らう

乙  
一  
一  
一  
一  
一  
一  
一  
一  
一

下

巨魁

あらしやうては人きえ積ハ暮らう  
あらしやうては人きえ積ハ暮らう  
あらしやうては人きえ積ハ暮らう  
あらしやうては人きえ積ハ暮らう  
あらしやうては人きえ積ハ暮らう  
あらしやうては人きえ積ハ暮らう  
あらしやうては人きえ積ハ暮らう  
あらしやうては人きえ積ハ暮らう  
あらしやうては人きえ積ハ暮らう  
あらしやうては人きえ積ハ暮らう

其  
松  
老  
児  
杜  
村  
橋

水

あらしやうては人きえ積ハ暮らう  
あらしやうては人きえ積ハ暮らう  
あらしやうては人きえ積ハ暮らう  
あらしやうては人きえ積ハ暮らう  
あらしやうては人きえ積ハ暮らう  
あらしやうては人きえ積ハ暮らう  
あらしやうては人きえ積ハ暮らう  
あらしやうては人きえ積ハ暮らう  
あらしやうては人きえ積ハ暮らう  
あらしやうては人きえ積ハ暮らう

万  
其  
梅  
小  
惟



ぬき枝の葉号しりゆり  
ほくくし二きりゆり水田ハ

耕生  
梅辰

このあつう吹くはの葉を枝の内  
福生にや葉細の木の葉ふれ  
あてきあてきハ葉きりハ障るハ  
蝶端く歩て又枝ハ木の葉生  
上生をぬけハあつうこのまハ  
何のあつうてきハあつう木の葉ハ  
能つハのあつうまきりこのまハ  
あつうハあつうまきりこのまハ

梅辰  
相富  
古山  
古山  
古山  
古山  
古山  
古山

本  
葉

曆  
葉

市子下田余歩りや  
新りもさる葉まきりハ曆葉  
葉まきりハあつうぬ葉あつ

梅辰  
相富  
古山  
古山  
古山  
古山

白ノ葉ノ部

あつうハあつう葉まきりハあつう  
あつうハあつう葉まきりハあつう  
あつうハあつう葉まきりハあつう  
あつうハあつう葉まきりハあつう

梅辰  
相富  
古山  
古山  
古山  
古山

葉  
方





去る  
つむ

揚てきてはるやも去るのこまふ人  
去るつむや露のこまふのこまふ

西了  
秋考

白戸  
の真

新し水と白戸ぬりりり白戸の真  
白月や雪の真の真の白戸の真  
るの白の威厳もこつりりりりりり

字据  
外  
統考

後  
踏

世を捨て人ものうま各後踏うれ  
白りりりりりりりりりりりりりり

山  
一  
後

白の去る部

炎  
天

炎下舟の遠くの親子連  
炎下舟一舟の遠く白炎  
炎下舟をまゝまゝ枝のまゝまゝ  
炎下舟は遠く遠く水の色

西崎  
一  
松年

枝  
柱

勤るねハ葉よまままままま  
炎下舟ハ枝まままままままま

仁  
因

白の去る部

白の去る部



美備

上下のふん秋まやあしそ備  
積あふふのねりしれり美備  
さけ月子備まらまや美備  
ふりまてしゆいへり美備  
本阿も月子まや美備  
上ま八舟梅架やあしそ備  
一方  
昌風  
素院  
一  
素風  
旭

丁ノ喜々々邪

美備

ふりまてしゆいへり美備  
積あふふのねりしれり美備  
さけ月子備まらまや美備  
ふりまてしゆいへり美備  
本阿も月子まや美備  
上ま八舟梅架やあしそ備  
一方  
昌風  
素院  
一  
素風  
旭

下

出代

出代や身まき物ハ新法海  
出代やすこそのまの舟くら  
出代のまき物や尾根の物  
出代やほらまき物の大  
可厚

秀隆も色くくつるを櫃くら  
了入二ツ目先生て来たてあまら  
控れや二まきまきし良島  
まつ控もあまらしほや赤山  
本後よあまらしほの控  
控れや尾のまのまらりま  
魚  
石  
一  
風  
舟  
舟  
他  
山



蝶

若縁よ書のりゝゝさふてふハ  
 目くうまてし遠くん中し月の際  
 幸彩のさししてまらうまの隙  
 蹤みそいの鞠よとるお情一ハ  
 何生て人の跡追ふ小てふハ  
 終ておく相打の上や若小隙  
 古は伴の目よつくとるあ隙  
 何本くるまよ交うう若小てふ  
 空あしと中る相中はや字の隙  
 袖三入中し隙あひはるあハ  
 しくしくとるねぬハる如縁ハ  
 一 旭  
 ト 子  
 喜 室  
 祖 友  
 任 白  
 古 通  
 一 梅 高  
 一 丹 雅  
 一 素 嵐  
 一 儀 風

手鞠

よしきりの勢ひよのままうハ  
 只しきまうとけい出符うあ  
 新しきあうとる手鞠ハ  
 一 梅 通  
 一 絨 差

丁ノ身ニ部無彩  
 丁ノ彩ニ部無彩  
 丁ノ身ニ部無彩

あノ身ニ部

明の真

白鳥の手えうねハ明の真  
 くらまうとてをわさこや明の真  
 一 梅 室  
 一 河 梁



他水より得る者や 明の者 菖甲

洗

洗重や 美物と云ふの 小料理屋  
洗重の うちと 中 送る 摺  
洗重の とき 本 洗ふ 物 明く 丸  
洗重や 多 明 月の 影 の 内  
菖 影  
富 女  
復 物

暖

暖年 多 糸 口 や ち 糸 為  
何 々 々 々 々 小 白 の 糸 考  
色 々 々 々 々 々 暖 々 々  
水 年  
物 風  
糸 月 丸

測

何 止 乃 者 々 々 々 測 々 丸  
健 々  
下

青

禁 々 々 々 測 々 丸  
青 々 々 々 々 糸 外  
青 々 々 々 々 測 々 丸

青

青 柳 や 水 の 糸 の 破 地 丸  
青 柳 や 一 層 糸 々 々 水  
青 柳 や 糸 帆 々 々 々 糸  
青 柳 や 何 々 々 糸 一 々 々  
青 柳 や 二 糸 々 糸 々 々 々  
青 柳 や 水 々 々 糸 糸 々 々  
膝 丸  
糸 糸  
糸 糸  
大 莫  
池



芋の角

舟引と足跡 備き河の角  
川はまきまにけりまて芋の角  
お夕の夕河へなきて芋の角

北亭  
己み  
御壺

胡葱

胡葱市 とうもろこしとて 搦也  
胡葱や小才合 庵子庵て出に

徳々  
素交

蛇

蛇のうろのうらやのあま蛇の考  
蛇まぐや井紐まにやう柳  
蛇まぐや 屋金の蛇の向う  
ついで来た蛇のゆりうらまのう  
特幸の居て蛇まのあう

みね  
二羽  
相窺  
一雅  
陸林



